

高島屋史料館TOKYO企画展 「まれびとと祝祭」を もっと良く知る ②7 冊

一選書・文 安藤礼二

『折口信夫』(安藤礼二), 講談社

一年に一度、時を定めて海の彼方より訪れ、祝福と警告をもたらす神にして人、「まれびと」。「まれびと」という存在の重要性をはじめて指摘した民俗学者にして国文学者の折口信夫の生涯に秘められた謎と、その思想の全貌を、なんとか捉えようと悪戦苦闘した書物。折口の仕事のもつ巨大さによりやく人々が気づきはじめ、時代が追いついてきた!

『列島祝祭論』(安藤礼二), 作品社

海の彼方から「まれびと」を招き、時間と空間をゼロに戻すとともに、時間と空間をまったく新たに再生させる。それとともに人々もよみがえり、森羅万象あらゆるものもまたよみがえる。日本という極東の列島に住み着いた人々は太古の昔から、そのような祝祭を行い続けていた。現代から神話の時代までさかのぼり、祝祭のもつ可能性を浮き彫りにする。

『まれびと』(石川直樹), 小学館

「まれびと」は神にして人、翁にして鬼、そして動物、植物、鉱物でもある。さらにまた、この日本列島の南から北まで、海に面した各地に点在し、現在でもそれを迎える祝祭が人々の間で熱心に行われ続けている。柳田國男や折口信夫を賛嘆させた、多様で怪異な「まれびと」たちの姿を求め、旅を続けた新時代の写真家にしてアーティストの貴重な記録。

『奥能登半島』(石川直樹), 青土社

「まれびと」たちの痕跡は、海に突き出た半島のような場所に残されていた。その一つ、能登半島には、最愛の恋人であり、後に養子ともした一人の青年とともに眠る折口信夫の墓も存在する。古代から、さまざまな文化が行き交っていた半島に現在でも息づく多くの貴重な祝祭、そしてそこを生きる人々の日常を活写した、旅するアーティストによる最新の報告。

『古代研究 改版 1～6』(折口信夫), KADOKAWA

折口信夫は、いま目の前に繰り広げられている祝祭の在り方を探求する民俗学と、この列島に残されたそれらの最古の記録が残された文献を読み解いていく国文学を、最も創造的な形に総合する「古代学」を提唱した。『古代研究』は、そうした折口の自他共に認める代表作である。国文学篇と民俗学篇からなるその全篇が、文庫として読めるようになった！

『太陽の塔』(平野暁臣), 小学館クリエイティブ

日本を代表する芸術家となった岡本太郎は、日本ではじめて開催された万国博覧会の会場に巨大な一つの塔を建てた。その塔の内部には、地下と地上と天上、過去と現在と未来を一つにつなぐ「生命の樹」が存在し、世界の各地から仮面と神像が集められた。太郎にとって「太陽の塔」は祝祭のシンボルであり、シャーマンが魂を飛ばす「宇宙の樹」であった。

『岡本太郎の沖縄』(岡本太郎), 小学館クリエイティブ

若き岡本太郎はパリで「祝祭」を主題とした民族学を学んでいた。太郎の芸術の核心には、そうした民族学的な探究とその成果が秘められていた。日本に帰国した太郎は、自らの信じる芸術に形を与えるとともに、柳田國男や折口信夫に甚大なインスピレーションを与えた「沖縄」を訪れ、そこを生きる人々、そこで行われている「祝祭」を躍動的な写真に収めた。

『岡本太郎の東北』(岡本太郎), 小学館クリエイティブ

いまだに「神秘」が色濃く残されている「辺境」をめぐる岡本太郎の旅は、「東北」にまで及んでいった。死者の声をいまこの場に降ろすイタコたちが体現する憑依の神道に、森羅万象あらゆるものが如来となる可能性を胎児のように孕んでいると説く「如来蔵」の仏教が重なり修験道が可能となった。「まれびと」は修験道を介して中世の芸能の基盤となった。

『身ぶりと言葉』(アンドレ・ルロワ＝グーラン), 筑摩書房

人類の直接の起源である「新人」ホモ・サピエンスが、アフリカを出て最初に展開したヨーロッパで残したものが芸術作品としての「洞窟壁画」であった。「洞窟壁画」は単なる絵でもなく、文字でもなく、人々を律する神話的な思考が象徴的に語られている。そう解き明かしたアンドレ・ルロワ＝グーランは、若き頃日本を訪れ、アイヌのもとで暮らしていた。

『世界の根源 先史絵画・神話・記号』(アンドレ・ルロワ＝グーラン), 筑摩書房

旧石器時代以来の狩猟採集を生活の根幹としながら、川沿いに安定した集落を築き、豊かな自然環境を活用して生きているアイヌの人々に、ルロワ＝グーランは、やはり装飾性に満ちた生活を送っていた「縄文」の人々の姿を重ね合わせる。同じ1911年に生まれたルロワ＝グーランと岡本太郎によって、「縄文」は人類の原型的な生活に直結するものと考えられた。

『アイヌ文化の基礎知識 増補・改訂』(アイヌ民族博物館監修), 草風館

アイヌの人々が送ってきた苦難に満ちた歴史、狩猟と漁撈と採集にもとづいたその生活の興味深い詳細、衣装や祭器に体现されている装飾性、神々と、その神々を宿した動物たちとの関係性、さらには個々の家族が住む家と集団の在り方等々、現在調べられる限りでの確実な知識を集大成した、最もハンディなかたちにまとめられたアイヌ文化に関する百科全書。

『アイヌ学入門』(瀬川拓郎), 講談社

現代の考古学的な知見によれば、この極東の列島で、安定していると同時にきわめて複雑な狩猟採集社会を営んでいた縄文の血を最も色濃く引いているのがアイヌの人々である。しかし、国境を越えた交易民、「海のノマド」でもあったアイヌの人々は、周囲からさまざまな影響を受け、現在に至る。その複雑な歴史を新たな視点から再構成する意欲的な試み。

『贈与論』(マルセル・モース), 筑摩書房

岡本太郎がフランスで師事していたマルセル・モースは、「未開」や「野蛮」と称されていた社会は、蓄積と格差を求める資本主義とは異なり、消費と平等を求めるもう一つ別の経済原理が貫かれていることを明らかにした。人々は、贈与を発生させる「祝祭」を行い続けていたのである。日本でもモースの思想が同時代的に受容され、民俗学が形づくられた。

『ラスコーの壁画』(ジョルジュ・バタイユ), 二見書房

岡本太郎とともにマルセル・モースの講義を受けていたのがフランスの思想家ジョルジュ・バタイユである。バタイユは、「祝祭」を、芸術の問題として考え抜いた。岡本太郎が芸術の起源としての「縄文」に向かったのと並行するように、やはり芸術の起源として、旧石器時代の狩人たちが洞窟に残した「壁画」に注目し、それを独自の形に読み解いていった。

『魔術的芸術 普及版』(アンドレ・ブルトン), 河出書房新社

社会学や民族学が提起するさまざまな問題こそが、現代の芸術を根底から活性化してくれるものではないかと考えたのはバタイユだけではない。夢と現実の間に表現の新たな領野がひらかれると提唱したシュルレアリスムを率い、バタイユと激しい論争を重ねたアンドレ・ブルトンもまた、「古代」と「未開」にこそ芸術の未来が秘められていると喝破した。

『野生の思考』(クロード・レヴィ=ストロース), みずず書房

バタイユやブルトンなどシュルレアリスムの芸術運動から甚大な影響を受け、人類学を人間にとってある種の普遍を探る学問であると定義し直したレヴィ=ストロースは、自然と文化の間に立ち、自然から文化への移行を、あたかも交響楽を奏でるかのようにして語り続けているのが神話であると主張し、全世界に衝撃を与え、学問の世界に革命をもたらした。

『ゾミア 脱国家の世界史』(ジェームズ・C・スコット)

狩猟採集社会は、現在の人類の母胎として、ただ遠い過去に存在していただけのものではない。資本主義的な蓄積と格差が強要される社会から奥深い山岳地帯に逃れ、「国家」を定義する集約的な農耕を拒否し、あらためて人間にとっての「原始性」、ノマド的な狩猟採集社会を選び直した「ゾミア」と総称される人々がいる。まさに「まれびと」たちの社会である。

『芸術人類学講義』(鶴岡真弓他), 筑摩書房

芸術が探究するもの、あるいは人類学が探究するもの、それらはまったく等しい。バタイユやブルトンのシュルレアリスム、モースやレヴィ=ストロースの野生、岡本太郎やルロワ=グーランの古代、柳田や折口の祝祭を一つに総合し、新たな地平を切り拓いていく学問にして表現こそが「芸術人類学」である。その全貌を明らかにしてくれる待望のマニフェスト集。

『洞窟へ 心とイメージのアルケオロジー』(港千尋), せりか書房

ルロワ＝ゲーランによる洞窟壁画の研究を引き続き、それをまったく新たな次元、すべての情報がデジタル化された現代的な知覚の問題にして現代的な芸術の問題として再考していく画期的な著作。われわれのなかには思考の母胎となり表現の母胎となる「内なる洞窟」が秘められている。その「洞窟」をあらためて論理として、表現として探究し直すのである。

『精霊の王』(中沢新一), 講談社

海の彼方から聖なるものを迎え、そして送り返す。その聖なるものとは神であり靈魂であり、なによりも仮面に宿る。折口が発見した「まれびと」を基盤とし、そこにさまざまな要素が積み重なり一つに融け合うことによって形になったものこそが中世の芸能である。中世の芸能がもっていた表現にして思考の可能性を限りなく広くまた深く探究した画期的な書物。

『出雲神話論』(三浦佑之), 講談社

「まれびと」祭祀の痕跡は、南島沖繩から北陸能登半島、さらには東北男鹿半島と「日本海」に突き出たような場所に点々と残されていた。それを担ったのは「日本海」を自由に行き来していた海民たちであり、その本拠地は、古代から「大和」と対立していた「出雲」にあったはずだ。考古学と人類学と歴史学の成果を踏まえ、紡ぎ出された巨大な物語がここにある。

『原本遠野物語』(柳田國男自筆), 岩波書店

折口信夫は、柳田國男が残してくれた一連の著作によって「まれびと」に導かれた。そのはじまりに位置する『遠野物語』のなかで、柳田は列島の北のアイヌ、さらには「縄文」、そして列島の南、台湾の「原住民」と総称される人々が体現してくれている遊動的な狩猟採集文化こそが、この列島の固有信仰の姿であると示唆していた。新たな時代の考古学や人類学は、柳田のヴィジョンを、あらためていまここに、よみがえらせてくれようとしている。

制作 / 高島屋史料館 TOKYO